HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	故農學士川上瀧彌君略傳
Author(s)	宮部, 金吾
Citation	札幌博物学会会報, 6(1), 70-73
Issue Date	1915-12-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61246
Type	journal article
File Information	Vol.6No.1_009.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

故農學士川上瀧彌君略傳

川上瀧彌君は明治四年一月廿四日を以て山形縣飽海郡松嶺町に生る。松山藩士川上十郎氏の二男なり。幼時より讀書を好み八九才の頃より附近の山野を跋渉して草木類を採集し其腊葉を作り又は其寫生を試み或は蝶蛾類を捕へて標本を作製し以て自ら樂とせり。明治十三年君齡十才の時腸窒扶斯に罹り遂に惡性僂麻質斯に變症し右脚の膝關節屈曲して伸びざるに至り、十五年十月東京大學病院に入院しドクトル、スクリツバの治療を受け大手術を受くる事三回、在院二百廿日にして漸く退院する事を得、病脚少しく跛するも歩行に支障なきを得るに至れり。

明治廿一年鶴岡中學校の開校せらるゝや君直に入學し其二年級に編入せらる。在校中君の植物に對する研究の志益々深きを加へ、熱心以て植物の採集に從ひ其廿四年笈を負ふて札幌農學校豫科に入學されし時には已に六七百種の莊內產植物標本を携へ來られしに見るも如何に君が孜々として此事に當られたるかを察知するに足らん。豫科五年、本科四年合計九ケ年の在學中君は學科課程履習の餘暇全力を植物學の研鑽に注ぎ一日として之を怠らず其結果論文として表はるゝもの頗る多し。君の植物學上の最初の論文は「夏日旅行中採集せる植物目錄」と題せるものにして廿五年夏期休業中渡島國福山、膽振國長万部、靜刈等に於て採集したる植物の目錄なりき、之は當時豫科の機關雜誌たりし「蕙林」に揭載せしものにして尙同誌上にて「植物雜錄」「鳥海山に植物を採るの記」等を發表せり。君が來札以來須臾も其研究を怠らず只管其完成を期せられしは故郷莊內の植物目錄にして其材料を補充せんが爲め廿七年歸省し翌廿八年より三ケ年間に亘りて「莊內產顯花植物」なる題下に東京植物學雜誌上に連載せられ其種類の數は實に千〇廿一の多きに達せり。

明治廿九年君が本科に進まるゝや益々植物學研究及び植物探險に努められあらゆる機會を求めて其目的を貫徹せしめん事を期せられたり。當時北海道廳に於て高山に於ける氣象觀測の擧ありしかば君は請ふて其御用人夫となり三十

年には釧路國雌阿寒山、卅二年には利尻山に各八月一ヶ月を山上に暮し職務に服する傍ら植物を採集し又親しく其分布の狀態を調査し歸札後其結果を「釧路國阿寒地方採集記」及び「利尻島に於ける植物分布の狀態」と題し東京植物學雜誌上にて公にせり。而して利尻植物に關する論文は東京植物學會の懸賞論文に應募して提出せるものにして審査の結果當選し銀牌を授與せられしものなり。之より川上瀧彌君の令名廣く吾植物學界に擴まれり。明治卅一年夏期休業中は北海道廳の囑託を受け千島擇捉島に航し其森林植物の調査に從事し其結果は本會第七十二回月次會(三十二年十月)に於て講演され又「擇捉島の森林樹種及び其分布」と題し植物學雜誌上に揭載せられたり。尙植物分類に關する論文にして川上君が學生時代に發表したるものに「Neottia kamtschatica Spreng. サカネラン」及び「メアカンフスマとテウカイフスマに就て」の二文あり。

川上君は札幌農學校在學中は植物病理學を專攻され卒業後も終始植物病害に關する研究に留意し其遂行に努力せられたり。

卒業論文としては本邦農業に重大の關係ある稻のイモチ病に就て研究せられ有益なる研究尠しとせず、該論文は後札幌農學會報に揭載され今日に至るも稻熱病に關する最も重要なる參考論文として一般に認めらるゝものなり。

君は明治卅三年札幌農學校を卒業せらるゝや直ちに北海道廳囑託となり本道重要樹木の分布効用識別に關する調査に從事し奉職僅かに一年に過ぎずと雖も其間に於て「北海道森林植物圖說」を出版し本道樹木研究史上に大に貢献する處ありたり。該書は現今に至るも本道產重要樹種の名稱、形狀、材質、効用、分布等を知る最良の著書の一たるを失はず。又此期間「奥尻島の森林植物」及「北海道森林植物樹葉識別法」なる二論文を公にす。

明治三十四年熊本縣立熊本農業學校敎諭に任せられ在職二年敎務の傍ら當時九州に於て最も人の注意を惹きたる桐樹の天狗巢病及七島藺の籠甲病の研究に從事し兩者共に其病原菌は學界未知の種類なる事を確めたれば天狗巢病菌には Gloeosporium Kawakamii Miyabe, 籠甲病菌には Kawakamia Cyperi (Miyabe et Ideta) Miyabe の學名を附せり此二研究は裳華房より夫々單行本として發

行せられたり。尙此間「陸稻に寄生する顯花植物」と題する論文と「農學校用植物生理學教科書」の著述ありたり。

明治卅六年十月臺灣總督府に轉任し農事試驗に關する事務及び國語學校講師を囑託せられ翌卅七年一月臺灣總督府技師に任じ農商課勤務を命ぜられ爾來十有二年農事試驗場技師を兼任しては植物病理部長となりて病害研究の基を樹て農務商工務林務の各課に兼勤しては專ら同島有用植物の調査に力を用ゐられ野生護謨樹の如き有益なる發見尠しとせず。然れども君が特に心血をそゝぎて完成を期せられしは殖產局博物館及び臺灣植物誌なりとす。幸に早田博士の如き有力なる植物學者の協力を得たるを以て君は專ら材料の蒐集に從事し幾度か新高其他の諸高山峻嶺蕃地を踏破し又附屬島嶼を巡歷して其植物調査を遂行し苦心努力の結果集められたる標本中學界未知の新種極めて多く其內君が功勞に酬ひんが爲め其姓の種名に附せられしもの實に數十種に及べり。

川上君の臺灣に於ける研究は多方面に亘り其趣味の廣く其造詣の深きは君の著述によりて知る事を得べし。君の臺灣に於ける植物病理學上の著述としては「柑橘病害論」「甘蔗の寄生顯花植物」「甘蔗病害論」「臺灣農作物病害目錄」(鈴木力治氏共著)、「茶樹腫萎病」「食用黑穗菌」等あり。又有用植物に關しては「臺灣野生護謨樹」「印度種護謨樹に就て」「護謨樹の栽培法」「木綿樹」「臺灣有用植物」「規那樹栽培の歷史」「臺灣農業植物誌料等あり。更に臺灣產植物及其分布に關しては「臺灣植物目錄」の外「臺灣新高山採集紀行」「澎佳島の植物」「新高山頂の植物」「A New Malus of Formosa」(小泉氏共著)「西澤島の植物」等の著述あり。明治四十四年六月官命に依て南洋諸島及東印度に出張し巡遊十一ケ月炎暑を冒し時に病軀を提げ、屈せず撓まず諸般の調査に從事し又無數の南洋有用植物標本を携へ歸り克く其使命を完ふせり。此行爪哇島に於て植物採集を試み幾何もなく新種の發見をなせるが如き君の以て大に得意とせる處なりき。其調査に係るものは南洋土產として講演に著述に廣く發表せられ「椰子の葉蔭」の外「爪哇視察復命書」「南洋視察談」「博物學上より見たる馬來印度旅行談」「On Some Celebes Plants」等の著あり。彼の「椰子の葉蔭」は君の掉尾の大著にして

茲に君の天才が遺憾なく發揮せられしを見る。單に植物學者としての觀察に止らず事苟も臺灣の產業上に裨益する處ありと認めたるものは細大漏さず綿密に之が視察を遂げ之を君が獨得の趣味多き彩筆を以て詳記されたるものにして曾て好評嘖々たりし「花」と共に永く愛讀せられ世を裨益する處多かるべし。

今年六月臺灣始政第二十回紀念日に際し紀念事業の一として南洋產物陳列の議あり。君主として之が任に當り刻苦精勵能く短日月の間に之が整理を了し公開するを得たり。此間に於ける過勞は遂に君の健康を害し同月二十六日病床に就き七月中旬漸く輕快に赴きたるも君が主管に屬する新紀念博物館の開館式近づきたるを以て病を押して其準備に努め將に明日を以て開館せんとするに至れる八月十九日積日の勞遂に發して館內に卒倒し八月二十日午後六時四十分溘焉として逝けり。君か忠實にして責任を重んずる精神は遂ひに君をして職務に殉ぜしむるに至れり。此を以て特旨により正五位に敘せらる君洵に死して餘榮ありと云ふべし。君が遺骨は君の生涯と因緣誠に淺からざる札幌に送られ其郊外圓山々麓の高燥にして氣淸き處に君の母校を望みて葬られたり。

君資性誠實、篤厚、友情に富み、親に仕へて至孝、骨肉に盡すに信敦、常に修養を怠らず人と交はるに好意を以てし一人の敵ありしを聞かず。公人としては責任を重んじ職務に忠實にして苟もせず。學者としては篤學精勵、其事に當るや規圖精密、用意周到之を實行するや耐忍不撓の精神を以てす。君が趣味亦頗る廣く文藻に富み秀吟多し。令閨榮子氏は快活にして淑德の譽高く君を輔けて渝る事なく君が臺灣に於ける功績は又實に夫人に負ふ處尠しとせざるなり。

而して今や君が學益々進み君が經驗愈々深きを致し其臺灣產業界に貢獻する處益々多大ならんとせし秋突如として君の易簀に遇ひしは誠に痛惜に堪へざる處にして獨り君の遺族親戚知友等の爲めのみならず又國家產業の發達學術の進步の上より見るも實に大損失たるを失はざるなり。

宮部金吾識